

# モリエールは実はコルネイユか？

——ピエール・ルイスと「モリエール＝コルネイユ」論争——

沓掛良彦

小序

三大悲劇作家（詩人）アイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデス、喜劇作家（詩人）アリストファネスが、古代ギリシアの演劇の黄金時代を体現しているように、十七世紀のフランス古典劇はコルネイユ、ラシーヌ、モリエールの三大劇作家によって代表されている。既に在世中からその名声が確立していたこの大劇作家たちは、フランス演劇史上の巨星として文学史上にゆるぎない位置を占めており、その評価は定まっていると云ってよい。

今日ではフランス内外を問わず、フランス文学の研究者あるいは演劇学者で、モリエールの代表作とされる喜劇の幾つかが、実はコルネイユの作であり、大劇作家であったコルネイユが、その弟子にあたるモリエールの名を借りて自作の喜劇を発表したのだなどと、真面目に主張する者はいないであろう<sup>(1)</sup>。ところが、一見荒唐無稽に思われるこの驚天動地の新説が、今世紀の初頭にフランスの一詩人によって唱えられ、当時のフランスの演劇界、文壇に論争と物議をかもしたのである。その論争を惹き起こした人物とは、散文詩『ピリテイスの歌』、小説『アフロデイト』、『女と人形』などによって知られる象徴派、頽唐派の詩人ピエール・ルイス Pierre Louys（一八七〇年—一九二五年）にほかならない。

ピエール・ルイスは詩人であると同時に、博学なギリシア学者にして書誌学者であり、三十歳そこそこでみづからを葬るような形で詩壇・文壇から退き、「アモアの隠遁者」となつてからは、もっぱらフランス古典主義文学の研究に専念した稀代の大碩学でもあった。当時のフランスにあつては、十七世紀フランス文学に通暁しているという点では、おそらくルイスの右に出る者はいなかつたはずである。そのルイスが突如として、詩人としてではなくフランス古典主義文学研究の専門家として、独立した喜劇作家としてのモリエールの存在を疑い、その名声に影を投げかけるような論文を発表したのである。当然のことながら、当時のフランス演劇界は騒然となり、ルイスの新説は学界、文壇の猛反発を呼んで、これを提唱したルイスはついに狂人扱いされ、世人の無学と無理解に幻滅を覚えたルイスは、ついに沈黙してしまつた。

ルイスの唱えた新説は、取るに足らぬ珍説あるいは馬鹿げた説として、今日ではほとんど顧みられることもないようであるが、不思議なことに、発表以来この説が学問的な手続きを踏んで正当に反駁され、その論拠が薄弱ないしは不十分であることが証明された上で、否定されたことはないようである。またコルネイユとモリエールの関係をめぐるルイスの「珍説」は、わが国のフランス文学研究の専門家たちにも、ほとんど知られていないのではな

いかと思われる。

今回ここで発表する小文はフランス古典主義演劇に関する論文ではなく、筆者が現在執筆中のピエール・ルイスの評伝『エロスの祭司』の一節を抽出したのだが、これだけでも独立した内容をもっている、ひとまずここに掲載して、フランス文学の専門家ことにもフランス古典演劇の研究者の御批判、御意見を賜りたいと思う。筆者はフランス演劇の専門家ではないので、小文はあくまでもピエール・ルイス研究という視点から書かれていることを、お断りしておく。

### ルイスの新説とそれをめぐる論争

一九一九年八月、『研究者と好事家の仲立ち』という雑誌の八月号に、「コルネイユは『アムフィトリオン』の作者か?」といういささか挑発的なタイトルの論文が載った<sup>(2)</sup>。著者はピエール・ルイスである。三年前に詩人としての最後の輝きを放ち、みずからの手で文学的墓碑を建てて以来、再び文献学者、古典文学研究者に立ち戻り、寝食を忘れてコルネイユとモリエール研究に没頭してきたルイスが、その積年の研究成果をついに世に問うたのである。

この論文を発表した頃、ルイスの生活は悲慘の極みに達していた。大戦に勝利したとはいえ長引いた戦いに疲弊しきつたフランスの経済は危機的状態にあり、激しいインフレが発生して庶民の生活はひどく苦しいものとなっていたが、収入のないルイスの生活は、一層悲惨であった。パリの冬の訪れは早い。九月に入るとルイスはもはや料理女を雇う金も無く、燃料も無く、ガスも止め

られて、寒さに震え、飢えに苦しみながら日々を過ごさねばならなかった。その中でコルネイユとモリエールに関する一連の論考を、次々と発表したのである。詩人としてはもはや三年前に燃え尽きてはいたが、文献学者、文学研究者としての意欲はまだ燃え盛り、憑かれたようにその研究に打ち込んでいた男の、最後の全力投球であった。この挑発的な論文が、一九二一年にまでその後三年間にわたってルイスを悩ませ、失意と絶望のあまりついには完全に沈黙させるに至った、「コルネイユとモリエール事件」の発端となったのである。コルネイユとモリエールの関係は多年ルイスの関心事であり、コルネイユを中心に置いて十七世紀文学を研究してきたこの文献学者にとつて、ぜひとも解明して学界や世人の認識を改めさせねばならぬ問題であった。この問題が頭を離れぬルイスは、彼がその研究の成果と信ずる「発見」とそれに基づいた新説を、ヴァレリー、グレッグ、ルベイ、ルシエールなど周囲の友人たちに、誰彼となく語って聞かせたらしい。ルイスの新説を聞かされたヴァレリーが、「でもピエール、そんなことを言つて、どういうことになるのかね、そんなことが?」と言つたため、二人の仲がしばらく冷えたとも伝えられる<sup>(3)</sup>。ヴァレリーの反応にも見られるように、周囲の人々もルイスの新説には好意的ではなかったが、彼としては、コルネイユとモリエールの関係を闡明したこの論考は、それまでの文学研究者の総決算であるとしても世に問わなければならなかったから、なん

詩人・作家であると同時に博大な知識を有する文献学者、書誌学者であり、古典文学研究者でもあったルイスは、その方面でもすぐれた学才を見せ、過去の文学の研究者としても確かな鑑識眼

を備えている。たとえば中世の滑稽文学『結婚十五のよろこび』の作者に関する文献学的研究や、ロンサールとマリイ・デュパンとの関係を論じたエッセイからも、その深い学殖の一端を窺うことができる。最初ギリシア学者として出発したルイスであったが、その後半生においては関心がむしろフランス古典主義文学、より具体的に言えば十七世紀のフランス古典劇(近年の言い方によればバロック演劇)へとうつる。後年は研究者としてのエネルギーの大半は、コルネイユ、モリエール、ラシーヌなどの作品を反復精読、熟読頌味することに費やされたと言っている。当時のフランス全土を通じて、ルイスほどフランス十七世紀文学に関する文献を豊富に所有している人物は、おそらくは一人としておらず、またルイス以上に、コルネイユやモリエールの作品に至らぬところなく隅々まで精通していた人物もいなかったろう。ことにもルイスのコルネイユへの傾倒ぶりと畏敬の念は絶大なものがあった<sup>(4)</sup>。コルネイユの全作品を文字通り枕頭の書として何十回となく反復精読し、これを隅々まで知り尽くして、その語法、詩法、文体、リズム等を微細に分析していたルイスの耳は、モーツァルト愛好家が数ある音楽家の作品の中でモーツァルトの曲を決して聞き誤ることがないように、コルネイユの詩句ならば、たとえアレクサンドラン(十二音綴詩句)の半行なりとも、たちどころにそれと識別できるまでになっていたのである<sup>(5)</sup>。さらにはルイスは、コルネイユの家系、修学、旅行の軌跡を丹念に調べ、その詳細な年譜を作成し、書体の筆跡学的研究をおこない、またコルネイユがその作品に付した序文や献辞を綿密に調べ上げた。こうしてコルネイユの作品を完全に自家薬籠中のものとしていたルイスが、この劇作家に関する学殖、造詣の深さにおいては、右

に出る者なしとの自負を抱いていたとしても、少しも不思議ではない。

その大碩学のルイスが、それまでに蓄積してきた文学全般に関する博大な知識と、文学者としての見識を賭けて、新説を打ち出したのである。その意気込みにはほとんど悲壮なものすらあった。

フランスの詩人は四人の人物によって創られた、ロンサール、コルネイユ、シエニエ、ユゴーがそれである<sup>(6)</sup>。

と自信をもって断言し、

あらゆる国の中で唯一つ、フランスがコルネイユ的な国であることを、フランスはどうして忘れることができようか?<sup>(7)</sup>

とまで言うルイスにとつて、コルネイユはギリシア人にとつてのホメロスにも比すべき巨大な詩人なのである。(コルネイユは、その資質においてホメロスに最も近いとは、ルイスの言である)<sup>(8)</sup>。コルネイユという巨大な存在は十七世紀を広く覆っていて、この偉大な劇作家は、巷間に信じられているように十篇かそこらの劇作品の著者であるばかりではなくその創作全体は膨大なものであって、百篇もの、あるいはそれ以上の数の劇作品の作者であった可能性がある。ただ、彼の名を冠せられぬままに世に出ている劇作品が、実は多く存在するのだというのが、積年にわたってコルネイユを中心として十七世紀古典主義演劇の研究に没頭してきたルイスの得た結論であった。そしてモリエールの傑作とさ

れている幾つかの喜劇のうち、ルイスは間違いなくそのコルネイスの影を見出したのである。この問題、この「発見」に関して『アンフィトリオン』の作者か?』という先の論文であった。

ルイスがこの「発見」に到達したのは、あるとき脳裡に浮かんできたモリエールの作とされている喜劇『アンフィトリオン』の一節が、コルネイスの詩句に酷似していることに気がついたからであった<sup>(9)</sup>。そこでこの作品を精密に読み直してみた結果、ルイスは直感的に、と言うよりはコルネイスの詩句ならば決して聞き誤ることのない詩人の耳を信じて、この作品はコルネイス以外の人物の手になるものではないことを、主張したのである。

ルイスのこの「途方もない」主張に対して、当然のことながら、六つの反論が掲載誌に出たが、いずれもルイスの新説に対しては敵対的であり、皮肉に満ちたものであった<sup>(10)</sup>。しかしことコルネイス研究に関しては絶対の自信を持っていたルイスが、そう簡単に引つ込むはずはない。反論を寄せた一人であるエミール・アンリオに再反論する形で、今度はより広い読者層を持つ『ル・タン』誌に、『アンフィトリオン』の作者』と題する論考を載せ、次のように断言したのである。

ピエール・コルネイスがモリエールの生涯全体を支配していたことは明白であり、コルネイスがモリエール幾つかの作品の創作に手を貸していたこと、容易に切り離すことのできる幾つかの「中断部分」と、幾つかの切れ切れの場面を無視すれば、『アンフィトリオン』全体がコルネイスの筆になることも、明白である。証明しなければならぬのはモリエールという署名

の方であって、コルネイスの文体ではない<sup>(11)</sup>。

さらにはルイスは時節の裏付けとして、モリエールに関する伝記的事実を挙げ、コルネイスのそれと比較することによって、『アンフィトリオン』がこの偉大な劇作家以外の作であることを証明しようとした。まずルイスはモリエールが、一六四三年から死に至る一六七三年まで、三十年間にわたってコルネイスの作品を演じ続けた俳優であったことを指摘し、コルネイスとモリエールの密接な関係を強調している。そして、『アンフィトリオン』は、コルネイスがあらゆる喜劇の形式を創り出し終えた一六五〇年に着想されたと考えられるとし、この時点で二十八歳だったモリエールの書いた文書は十行ほどの領収書あるだけで、それにさえも初歩的な文法の誤りがあつて、到底十二音綴詩句を用いて劇作品を書く能力はありようがない、と説く<sup>(12)</sup>。(モリエールは立派な教育を受けて法学を修め、弁護士として法廷に立つ資格を持ちながら、演劇への情熱やみがたく、若くして旅行者の一座に身を投じたとされているが<sup>(13)</sup>、ルイスはこれに否定的であつた。ルイスによれば、モリエールは十四歳で初等教育を終え、読み書きを学んだが、大嫌いだつたギリシア語、ラテン語はついに身につけなかつたという<sup>(14)</sup>。確かにモリエールの前半生にはいろいろ不明な点があるようで、ルイスの推論もそのあたりをひとつの基盤としていると言える。)それほどにも無学であつたモリエールが、『アンフィトリオン』をの創作を思い付くなどということは到底あり得ない、とルイスは主張するのである。モリエールの伝記は一六五八年までははつきりしないが、この一六五八年という年は、モリエールが彼の一座を離れてルーアンにやって来た年で

あつて、そこで劇作家を志した彼は、六か月にわたつて偉大な師であるコルネイユに弟子入りして作劇の修業をし、劇作家としてもデビューすることになったのだといふのである。

モリエール風の七つの喜劇の型を創造した後、偉大なコルネイユは六か月で、その巨人のような手でもつて、自分には似ていないモリエールといふ一個の人物を作り上げたのである。：モリエールはコルネイユの生んだ傑作である（15）。

というのがその結論であつた。この偉大な劇作家は、モリエールがその代役をすることを望んだとルイスは考えた。当時もてはやされていた「才女気取りの女たち」の酷評にさらされ、うんざりして劇作から遠ざかつていたコルネイユが、自分が作り上げた傑作であるこのモリエールといふ俳優の名を借りて、幾つかの喜劇作品を発表したのだと、ルイスは主張するのである。ルイスの主張が正しいとすれば、モリエールの名で発表された最初の作品が、一六五八年の『才女気取りの女たち』であつたことは、示唆的である。それによれば、コルネイユがモリエールの名を冠した喜劇によつて、彼の劇作品をあれこれあげつらつた才女気取りの女たちを痛烈に諷刺し、一矢報いたことになるからである。（ただし通常文学史の上では、モリエールの最初の作品は一六五五年に発表した喜劇『粗忽者』だとされている）。モリエールの名を借りたのは、仮にコルネイユがモリエールの名で発表された作品群を自作として発表していたならば、上演されない恐れがあつたからである、というのがルイスの考えであつた。

これが言わば第二弾であるが、ルイスは自分の説に猛烈に反発

する手合いが、結束して攻撃をかけてくるのに対して、さらに第二、第三の矢を放つてこれに答えた。まずは今言及した「アンフィトリオン」の作者」といふ論考に続いて、同じ「ル・ダン」誌上に『大コルネイユ』といふ文章を発表し、コルネイユは自分の名を冠していない数多くの作品を書いた可能性があつたことを主張したのである。さらにはこの年の十月から十一月にかけて、今度は『喜劇』誌上に「口をきく前に」「女学者」「アルセストだつたアルセスト」「コルネイユの『詐欺師』とモリエールの『タルチュフ』」「プシシエ」の二つのテクスト」などの一連の論考を載せ、モリエールの作とされている喜劇の幾つかは、実はコルネイユの作品だとする自説を敷衍、詳説したのであつた。フランス古典主義文学の研究者としてルイスが願うところはただひとつ、カエサルのはカエサルに返せといふことであつた。「コルネイユ像をピエール・コルネイユの身の丈にふさわしいものとする（16）」といふのが、その意図するところだったのである。モリエールが創り出したとされる「性格喜劇」は、実はコルネイユの創造にかかるものだといふ主張が、その根幹をなしている。

一見奇矯と見えるその説は、コルネイユのものをコルネイユに返し、これを正当に評価しようといふ学問的な狙いから出たものであつて、彼の論敵たちが曲解したように、モリエールを貶めようなどという意図は毛頭無かつたことは言うまでもない。ルイスはモリエールがすぐれた演劇人であることは、ルイスもつとに認めていた。しかしその主張するところはきわめて大胆であり、また意表をつくものであつた。

詩人たちは、コルネイユの族である詩人たちは、それにすべ

てのコルネイユ愛好家たちは、一人残らずタルチュフとポ  
リユークトがひとつの頭脳から生まれた両極であることを理解  
している。(17)。

モリエールの作でもなく、トマ・コルネイユの作でもなく、  
ピエール・コルネイユの『ドン・ジュアン』：(18)

私は『ドン・ジュアン』がコルネイユの作であることを知っ  
ている。(19)。

一六六〇年コルネイユは自分の作品を抹殺し、抗いがたいほ  
ど喜劇を好むことを宣言した一六四三年の序文を、もはや二度  
と印刷に付することはない。

一六六二年にはコルネイユは、ついに「彼の人生のドラマ」  
つまりはモリエールの名を冠したほとんどのすべての作品を、上  
演にかける決意をする。彼はそれを完全な秘密裏におこなうで  
あろう。(20)。

といつたいかにも詩人の独断と見える主張が、モリエールの喜劇  
愛好家やモリエール研究家たちひどく刺激し、その憤激を買った  
ことは容易に想像がつく。『アンフィトリオン』ばかりでなく、モ  
リエールの傑作とされる『ドン・ジュアン』、『タルチュフ』も、  
モリエールの名を借りて実はコルネイユが執筆した作品だと、と  
いうのである。また『女の学校』、『人間嫌い』、『女学者』といっ  
た名作も、その創作にはコルネイユが関わっていたのではなから  
うかとの疑問を投げかけているのであるから、これらの作品をモ

リエールの作と信じて疑わない人々にとっては、ルイスの唱える  
「発見」はまさに驚天動地の珍説以外の何物でもなかった。ルイ  
スの大胆な新説が、世人をまどわす奇矯な妄説というふうを受け  
取られたのも、無理からぬところであった。

モリエールの作品は、実はコルネイユの筆になるものだと、の自  
説を展開するに際して、ルイスがその論証として用いたのは、彼  
が誰よりも精通熟知しており、詩人としてそれを聞き分ける鋭敏  
な耳を持っていたコルネイユの詩句に関する知識であった。ルイ  
スによれば、コルネイユの作品の詩句にみなぎつている力強さと  
独自性を感得できる者には、それを見分けることは容易である。  
モリエールの作品にはしばしば平板さや弱い部分が見受けられ、  
コルネイユの詩句とは見まがうべくもない。それを例証すべく、  
ルイスはコルネイユの『詐欺師』とモリエールの『タルチュフ』  
をこのテクストを比較検討しながら、『タルチュフ』には「二様  
の言葉づかい」が見られることを指摘している(21)。コルネイユ  
本来の詩句と、モリエールがそれに上演の必要上から演出家とし  
て書き加えた拙劣な文とがそれぞれあり、詩的、文学的価値からし  
て両者は同じレベルにはない、というのがその論点であった。つ  
まりはモリエールの作とされる喜劇の中で、すぐれた部分は比類  
なき詩人であり劇作家であるコルネイユの筆になり、拙劣な部分  
はモリエールの筆になるものだ、という説を唱えたのである。ル  
イスの意図はともあれ、これによるとどうしてもすぐれた劇作家  
としてのコルネイユ、凡庸な劇作家としてのモリエールという図  
式が出来上がってしまうことは避けられない。「人々がいざれモ  
リエールの名を冠することのできなくなるコルネイユの詩句が、  
二万行はある」(22)というのが、コルネイユに精通した文献学者

であり、これを自家薬籠中のものとしていた詩人ルイスの結論なのである。このような新説に対して、モリエール学者や演劇人が、苛立ち、憤激したのもむりはない。

フランス古典劇（バロック演劇）に疎い筆者には、ルイスの唱える説の当否は判断がつかない。確かにその説くところは、世におこなわれている文学史やフランス演劇に関する書物などの記述とは大いに異なっている。またH・プーライユがこれを三十年後に取り上げるまでは、ほとんど顧みられることもなく、フランス演劇の専門家たちにも問題にされなかったようである。しかしルイスの説を虚心坦懐に読めば、かなりの説得力に富み、それが決して妄説でも珍説でもなく、詩人でもある一人の文献学者が真摯な態度で「発見」を提示し、世に問題を投げかけたものと受け取れる。少なくとも、鬼面人を驚かすような奇矯な妄説として無視したり、一笑に付すべきものではなく、ましてや冷笑や憤激の対象とすべきものとは思われない。

だが、ルイスが当時の学界や演劇界に向かって投じたこの一石を、その世界の人々はまったく異なつたふうにと受けとめ、ほとんどヒステリックな拒絶反応と、悪意に満ちた激烈な反発をもつて、これに報いたのである。ルイスの新説を支持する声はほとんど聞かれなかつたばかりか、その説くところに冷静に耳を傾け、その論点を吟味、分析した上できちんと反論するということすらもなされなかつた。ルイスにとってシヨックであり、また大いに彼を幻滅させたのは、文献学者、古典文学研究家として自分が提示し真摯な説を、当初多くの人々が冗談として受け取ったことであつた。「あのルイスがまた人をついでいる」、そう人々は考えたのである。「あのルイス」、つまりは四半世紀昔に『ピリテイス

の歌』を世に送つて、古代ギリシアの女流詩人の作品の作品と偽り、著名な古典学者を含む多くの人々をみごとに欺きおせたことが、まじめな文献学者としてのルイスの信用を失わせる結果となつたのであつた。その昔まんまと欺かれた学者たちや批評家たちは、その恨みを忘れてはいなかつた。かつての大成功が、今回は高いものについたのである(23)。「ピリテイス」は私にとつては同時に成功でもあり、失敗でもあつた」と、ルイスはプティに述べたというが、その言葉のうちには、この名作を書いたことで詩人としては輝かしい名声を得ながら、学者としては信用を失うこととなつた、ルイスの複雑な心境が覗いているように思われる。

しかしルイスがこの「コルネイユルモリエール問題」に関して、矢継ぎ早に第二第三弾を放ち、真剣であることがわかると、世人の反応は一転して嘲笑と悪罵に変わった。「ピエール・ルイスは気が狂つた」との声が、ソルボンヌの教授連、モリエール学者、批評家たち、コメディー・フランセーズの俳優たちから、一斉に上がった。ことにも自分たちの守護神とも言うべき、神聖なる偶像モリエールを穢されたと感じたコメディー・フランセーズの俳優たちからは、ルイスを弾劾すべきだとの主張でなされ、中にはこのけしからぬ文士を法廷に訴えようとする者さえも出てきた。ルイスを擁護しようとする者はおろか、冷静に学問的な議論をしようとする者すらなく、ただいたずらにルイスに敵意を抱き、ルイスの説はとんでもない暴論、妄説だとわめき立てる声のみが聞こえ、悪罵が浴びせられた。ルイスは孤立無援で、まったく四面楚歌であつた。しかもあきれたことに、ルイスを嘲笑し非難するほとんどの人々が、実際にはコルネイユの作品もモリエールの

作品もろくろく知らず、ただただ感情的になつてルイスの説はでたらめだと非難し、「証拠を見せろ」と要求するばかりであつた。そう言いながら、誰一人として、モリエールは確かにモリエール以外ではあり得ず、その作品はすべて彼の筆になるものだということを、積極的に証明しようとはしなかつたのである。その意味では、この「コルネイユ||モリエール問題」をめぐる論争は、およそ公平なものであつたと言ひがたい。

寢食を忘れ、半ば盲いた眼をもつてコルネイユやモリエールを必死に反復熟読し、ひたすら研究に没頭してきた結果がこれであつた。ルイスは世人の無理解と、敵対的な態度にひどく失望し、侮辱を感じ、それに何よりもその無学と無教養に呆れはてて、ついには論争から身を引いてしまつた。世人や論敵が彼に要求した自説の裏付けとなる「証拠」や資料も、もはや世の人々に示そうとはしなかつた。世人がルイスの新説をまじめに受けとめてくれさえすれば、膨大な研究ノートを披瀝し(24)、それによつて自説をより説得力あるものとするこゝもできたはずであるが、こういう手合いを相手にもはや何を言つても無駄だと観念したのである。コルネイユに関してはフランス随一の学殖を有すると自負する、自分の言葉に冷静に耳を傾けようともせず、いたずらに非難の声を上げ、嘲笑を浴びせて彼の新説を笑殺し去ろうとする連中を相手にすることが馬鹿馬鹿しくなつたのである。ルイスに残されたのは、激しい幻滅と失望であり、無教養な手合いから嘲笑を浴びた苦々しい気持のみであつた。以後ルイスは、文学研究者としても完全に沈黙を守り、研究の成果を一切発表としなくなる。両眼が完全に光を失うまで、あとわずかな歳月が残されたのみであつたが、それでもなお沈黙のうちに、みずからのため

に研究することはやめなかつた。世人の無理解に呆れ、発表しなかつたものの、一九二一年まで友人たちへの手紙では、この問題にしばしば言及し続けている。この問題に関しては、実に二〇〇頁にも及ぶ論考を書いたと、ルイスはティエリ・サンドルに語つたという。ほとんど盲いた文献学者、古典文学研究者としてのルイスの、恐ろしいまでの執念であつた。エロスの魔は、また学問の鬼でもあつたのだ。

かくしてルイスの最後の氣力を奪い去り、彼を一層人間嫌いにして孤独の淵に突き落としたこの虚しい論争のうちに、一九一九年は暮れた。ルイスは五十歳を迎えようとしていたが、もはや生ける屍に近づきつつあつた。三年前に詩人・作家としてはもはや燃え尽き、今度は文献学者、文学研究者としては世の嘲笑を浴びて沈黙を余儀なくされ、その矜持と自負は完全に打ち砕かれたのである。ルイスが意氣阻喪したのも、当然のことであつた。詩人・作家として、また稀代のエロスの魔として生きてきたこの人物が、文字通り人生の黄昏を迎えるのはこの頃からだが、闇の中で孤独な死を遂げるのは、それから四年半後のことである。

ちなみに、ルイスの唱えた「コルネイユ||モリエール」説は、上記のとおり狂人の説として嘲笑を浴びて葬り去られ、まともには相手にされなかつたが、その余波は残つた。一九四九年にスコットランドの大学教授であるエリザベス・フレイザーという女性が、パリの国立図書館に保存されていた『ソロンの死』という劇作品を、コルネイユの作品として発表した(25)。これはルイスがコルネイユ研究に用いていた筆跡学の手法を応用した研究であり、彼の研究はこのスコットランドの女性学者のうちに、反響を見出だしたのである。不幸にして、ルイスの場合と同じく、彼女



の研究はコルネイユ研究家たちの憤激を惹きおこし、容れられなかった。その後一九四九年に、遺稿として残されたコルネイユに関するルイスの研究ノートの一部を入手したH・プーライユが、ルイスの論文に基いて、モリエールの、「加筆した」部分を除いた『タルチュフ』を刊行した<sup>(26)</sup>。この作家は、さらに一九五七年には、『モリエールの仮面をかぶったコルネイユ』<sup>(27)</sup>という大著をあらわし、ルイスの説を再び取り上げこれを支持したが、彼を待ち受けていたのはルイスに浴びせられたのと同じ嘲笑であり、敵意に満ちた批評であった。こうしてルイスの「コルネイユ || モリエール説」は、二度葬られたのである。その後も偉大な喜劇作者としてのモリエールの権威が揺らぐことはなかったようである。寡聞にして、以後モリエールの代表的な喜劇の真贋が問われる論争がおこなわれたという話は聞かない。

「モリエールは実はコルネイユ？」というのはまったくの虚妄で、はけた詩人の幻想にすぎなかったのだろうか。ルイスの唱えた新説を読み直してみると、必ずしもそうは思われない。それにそもそも、モリエール研究家のうちどれほどの人々が、実際にルイスの論文、論考を読んだことがあるのか、それを問うてみたい。<sup>(28)</sup>

注

(1) 例えば、ガルニエ版の『モリエール劇作全集』(Molière, Théâtre Complet)にまえがきを書いているロベール・ジュエニ(Robert Jouanny)も、同じガルニエ版の『モリエール劇作品選集』(Molière Théâtre)の序文を書いているモー

リス・ラ(Maurice Rau)も、そのような説が提示されたことがあることは、きうたく触れられていなう。

(2) Pierre Louys, "Cornelle est-il l'auteur d'AMPHYTRION?", *Intermédiaire des chercheurs et des curieux*, Août, 1919, の論文は Pierre Louys, 1929, 1931 pp. 51-86 に収められている。以下ルイスの上記論文(以下 Molière-Cornelle と略記)からの引用は、この全集の複製版(Slaktine Reprints, 1973)に拠る。[P.L.O.C. と略記]

(3) J. Cassou, *Souvenirs du Haméau du Boulan-villiers*, *Bulletin des amis de Pierre Louys* No.4, 1977

(4) Jean-Paul Goujon, Pierre Louys, *Une vie secrète*, Seghers, 1988

(5) Paul-Ustin Dumont, Pierre Louys, *L'Ermite du Haméau*, Librairie Vendôme, 1985, p.280 R. Cardime-Petit, Pierre Louys *inconnu*, L'Eran, 1948, P.193

(6) Pierre Louys, "Pierre Cornelle", P. L. BROU-TILLES, *recueillies par F. Lachèvre*, Imprimé pour F. Lachèvre, Paris, 1938, p.11

(7) *ibid.*

(8) Molière-Cornelle, P. L. O. C. Tome X p.58

(9) cf. C. Petit, op. cit. pp. 94-115

(10) H.P. Clive, Pierre Louys, *A Biography*, Clarendon Press, Oxford, 1978, pp. 210-211 J.P. Goujon, op. cit. p.349

(11) Molière-Cornelle, O. C. Tome X pp. 62-63

ちなみにカルダヌヌ・プティによれば、ルイスは「モリエールの最大の傑作である劇作品は、そこにコルネイユの内面生活の一部が映しだされている鏡である」とも語っていたといふ。cf. C. Petit, op. cit. p. 190

(12) Molière-Cornelle, O. C. Tome X p.65

(13) 『ラルース大百科辞典』「モリエール」の項。(Grand Dictionnaire Encyclopédique Larousse) 傑作 *Le Misanthrope* 18 を『孤客』というタイトルを付して邦訳した辰野隆は、モリエールについて「モリエールは大作家たるに十分な資格を持った男であった。文学哲学および法律を学び、特に法律のほうでは弁護士として法廷に立ち得る資格まで持ちながら、とかく芝居好きが彼をして真面目な職業につきにくくさせて、とうとうはいり込んだのがベジヤール兄弟一座であった。」と書いている(『岩波文庫解説』「自然児モリエール」)。

- (14) Molière-Cornille, O. C. Tome X p.63  
 (15) *ibid.* p.67 cf. C.Petitop.cit.67  
 (16) *ibid.* p.68  
 (17) *ibid.*  
 (18) *ibid.* p.79  
 (19) *ibid.* p.80  
 (20) *ibid.* p.78  
 (21) *ibid.* pp.72-73  
 (22) *ibid.* p.77  
 (23) cf. C. Farère, *Mon ami Pierre Louys*, Editions Domat, 1954, p.59  
 (24) ルイスが積年にわたってのコルネイユを中心とする古典主義演劇に関する詳細かつ膨大な研究ノートを作成しており、それを見せられたことを、知人の書誌学者F・ルシェーヴルが語っている。それらは生前に発表されないうまま、目方にして四二〇キロにも及ぶ途方もない量の遺稿の一部として残され、ほとんどが散佚してしまった。現在残っているのは注(6)に挙げたルシェーヴル編の、ルイス雑纂・小品集(BROUTILLES)に収められたコルネイユに関する研究ノートの一部と、全集には収録されなかった「コルネイユ・モリエール」問題に関するルイスが発表した研究の一部分のみである。
- (25) J.P.Goujon,op.cit.p.356  
 (26) *ibid.*  
 (27) H.P.Clive,op.cit.p.211 J.P.Goujon,op.cit.p.356  
 (28) 最後に付言しておく、仮にルイスの仮説ないしは新説に耳を傾けるに足るところがあるとすれば、コルネイユがなぜ自作を自分の名でなく、モリエールの名を借りて発表、公演したかという問題が残る。ルイスの主張によれば、それはひとつには、当時の教会のコルネイユに対する態度に起因するものであった。名高いランブイエの館での悲劇『ポリュエクト』の朗読を聴いたゴドー司教は、ただちにこの作品を聖像破壊の罪で弾劾し、それをコルネイユに伝えた。教会からも危険視され、また宮廷人や貴族の人士の間でも好意を持たれていなかった上、当時幅をきかせていた「才女気取りの女たち」—les Précieusesの愚劣な劇評にうんざりし、すっかり人間嫌いになっていたコルネイユは、彼に弟子入りしていたモリエールの名を借りて、自由に自作を発表し

ただというのである。確かにルイスの主張するとおり、当時の状況からすれば、モリエール作としないかぎり、コルネイユが痛烈な風刺を込めた自作の喜劇を、自由に上演することは困難であったろう。

全体として評すれば、ルイスが世に問うた六篇の論文から判断する限りでは、モリエールの多くの作品をコルネイユに帰すべきものとするルイスの立論は、フランス語の韻律に極度に敏感な詩人としての直感に頼りすぎている感は否めない。演劇界や学界の人士たちのヒステリックな拒否反応に幻滅したルイスが、彼の説くところの裏付けとなる研究成果を世に公表することを拒んだため、結果としては、その新説の論拠薄弱な「珍説」として葬り去られたのである。詩人の死後に散佚した膨大な研究ノートや論文がいつか発見されるようなことがあれば、ルイスの唱えた説も顧みられる可能性はある。

